

## 総 題 「永遠の命」 死の起源、死すべき者、未来の希望

## 第2課 罪の世界における死

平本 光

## 1. 安息日午後 今週のテーマ

今週はアダムとエバが神との約束をやぶり、私たちの世界に存在する苦しみや悩み、誘惑などの問題や、死が存在するようになったことを理解する基本的な流れを教えてください。またその問題に対して神がエデンの園で人類のために、解決を与える約束という希望を与えられたことについて学びます。

## 2. 日曜日：相反する言葉

聖書を見るときに神様は、人の住む地球を愛で満たそうとなさいました。誰も傷つけず、悲しむことのない罪のない世界を創造されました。また神がつくったものはすべて、非常に良かったのです（創世記1：3 1）。「良かった」には人間も含まれます。人間も道徳的に優れており、愛することができ、完璧に創造されました。

そして、神は人に選ぶ自由を与えられました。神はエデンの園に2本の木を置くことによって自由に選ぶ（選択の自由）ことができる機会を与えられました。その2本の木とは、命の木と、善悪を知る木のことです。命の木から食べることによって、神への忠誠を示すのです。しかし、神は善悪を知る木から取って食べることを禁じられました。神の声に聞き従わずに、善悪を知る木から取って食べることは、神に反対することを意味していたのです。（創世記2：7～2 5節）

しかし、この善悪を知る木のもので、サタンが蛇のふりをして神よりも説得力のある方法で、「へび自身も、禁じられた実を食べ」（『人類のあけぼの』上40頁）という実際に食べて死なない姿を見せながら、神の言っている「善悪を知る木から取って食べることは悪いことではないと、エバをだまそうとします（創世記2：1）。このことから、

①人間の理性は、神とサタンのどちらが正しいのかを判断できるほど安全ではない。

②神の言葉はどんなときでも常に正しく信頼できる。

③神は様々なものを用いて、神に従えるのか私たちをテストする。

という3つのことが教えられています。

## 3. 月曜日：蛇に欺かれて

蛇の姿になったサタンは、エバを誘惑するために、エバが蛇の言うことを信じるような言葉を用いま

した。<sup>えん き た</sup>「園のどの木からも食べてはいけない、などと<sup>ほんとう かみ い</sup>本当に神は言われたのか」(<sup>そうせい き さん いち</sup>創世記3：1)と、わざと<sup>まちが しつもん</sup>間違っ<sup>その ちゅうおう</sup>た質問をエバにすることで、(<sup>き み</sup>エバが「園の中央にある木の<sup>と</sup>実については、これを<sup>と</sup>取って<sup>た</sup>食べるな、これに<sup>ふ</sup>触れるな、死<sup>し</sup>んではいけないからと、<sup>かみ い</sup>神は言われました。」(<sup>そうせい き さん さん</sup>創世記3：3)と) <sup>おも</sup>思わず、(<sup>へび まちが ただ</sup>蛇に) <sup>ただ</sup>間違いを正し、<sup>い おし</sup>正しいことを言って教<sup>き も</sup>えてあげようと、いい<sup>き も</sup>気持ちにさせ、エバを<sup>ゆ だん</sup>※1油断させました。エバは、自分が一人なのに<sup>き づ</sup>気付いたときに、<sup>み き けん かん</sup>身の危険を感じましたが、自分には<sup>じ ぶん あく み わ</sup>悪を見分けて、それを<sup>しりぞ</sup>※2退<sup>ち え</sup>ける知恵と<sup>ちから</sup>力が十分にあると<sup>かんが お つ</sup>考<sup>み</sup>えて落<sup>み ひ じょう う つ く</sup>ち着こうとしました。その実は、非常に美しく、エバは、なぜ神がこれを<sup>かみ きん</sup>禁じられたのかと<sup>ぎ もん いだ</sup>疑問を抱<sup>へび</sup>きました。蛇は、それに<sup>さわ</sup>触<sup>がい</sup>つても害はなかった(<sup>し</sup>すぐに死<sup>み た</sup>ぬことはなかった)のだから、その実を<sup>だいじょう ぶ い</sup>食べても大<sup>さわ</sup>丈夫だと言<sup>な に わる</sup>います。エバは、<sup>さわ</sup>触<sup>な に</sup>つても何<sup>わる</sup>も悪<sup>わる</sup>いことが起<sup>お</sup>こらない(<sup>し</sup>すぐに死<sup>み た</sup>ぬことはなかった)ので、<sup>だいたん</sup>だんだん※3大<sup>かみ</sup>胆<sup>やくそく やぶ</sup>になり、(神さまとの約束を破<sup>やぶ</sup>つて) <sup>た</sup>食<sup>た</sup>べてしまいます。

「悪」が入り込んでくる4つのことがあります。

- ①<sup>だれ</sup>誰でもしているから大<sup>だいじょう ぶ</sup>丈夫。
- ②<sup>ちい</sup>小さなことだから<sup>き</sup>気<sup>き</sup>づかれないだろう。
- ③<sup>いちど</sup>たった一度のことだから。
- ④<sup>わか</sup>まだ若いから、<sup>じかん</sup>時間があるからやめられるだろう。

サタンに騙<sup>だま</sup>されないように、<sup>あく</sup>悪<sup>まな</sup>について学<sup>たいせつ</sup>ぶことは大切なことかもしれませんが、<sup>じっさい</sup>実際にその悪<sup>わる</sup>いこ<sup>わる</sup>とを<sup>おこな ひつよう</sup>行<sup>おこな</sup>う必要はないのです。

※1 <sup>ゆ だん</sup>油断<sup>じ ぶん</sup>：自分は大<sup>だいじょう ぶ</sup>丈夫<sup>おも</sup>と思<sup>おも</sup>ってしまうこと

※2 <sup>しりぞ</sup>退<sup>う い</sup>ける<sup>お かえ</sup>：受<sup>お</sup>け入<sup>かえ</sup>れないで追<sup>お</sup>い返<sup>かえ</sup>す

※3 <sup>だいたん</sup>大<sup>こわ</sup>胆<sup>き も</sup>になり<sup>おも</sup>：怖<sup>き</sup>い気<sup>き</sup>持<sup>き</sup>ちがな<sup>おも</sup>くなり、思<sup>おも</sup>い切<sup>き</sup>って

#### 4. <sup>かよう び</sup>火<sup>けつ</sup>曜<sup>し</sup>日<sup>し</sup>：「決<sup>し</sup>して死<sup>し</sup>ぬことはないでしょう」

サタンはエバに「決<sup>けつ</sup>して死<sup>し</sup>ぬことはない。それを<sup>た</sup>食<sup>た</sup>べると、<sup>め ひら</sup>目<sup>かみ</sup>が開<sup>ぜんあく</sup>け、神<sup>し</sup>のように善<sup>し</sup>悪<sup>し</sup>を知るものになることを神は<sup>かみ ぞん</sup>ご存<sup>そうせい き さん</sup>じ<sup>よん</sup>なのだ」(<sup>おし</sup>創世記3：4、5)と教<sup>うそ げんざい おお</sup>えましたが、この嘘<sup>ひと なや</sup>が現<sup>なや</sup>在<sup>なや</sup>も多<sup>なや</sup>くの人<sup>なや</sup>を悩<sup>なや</sup>ませています。<sup>れいこん ふめつ</sup>霊<sup>し</sup>魂<sup>し</sup>不<sup>にくたい</sup>滅<sup>く</sup>という「死<sup>し</sup>んだら、肉<sup>せいしん</sup>体<sup>たましい</sup>は<sup>れい</sup>朽<sup>こ</sup>ち<sup>こころ</sup>るが、精<sup>にくたい</sup>神<sup>り だつ</sup>・魂<sup>り だつ</sup>・霊<sup>り だつ</sup>・心<sup>り だつ</sup>は肉<sup>り だつ</sup>体<sup>り だつ</sup>から<sup>り だつ</sup>離<sup>り だつ</sup>脱<sup>り だつ</sup>して、<sup>れい</sup>霊<sup>せ かい</sup>の世<sup>のぼ</sup>界<sup>のぼ</sup>に登<sup>せつ</sup>って<sup>せつ</sup>いく」という説<sup>じ き</sup>です。ある時<sup>てんごく い</sup>期<sup>い</sup>が<sup>い</sup>き<sup>い</sup>たら、それぞ<sup>てんごく い</sup>れ、天<sup>てんごく</sup>国<sup>い</sup>に行<sup>い</sup>き、<sup>い</sup>極<sup>い</sup>楽<sup>い</sup>に行<sup>い</sup>き、<sup>い</sup>ある人<sup>い</sup>は地<sup>い</sup>獄<sup>い</sup>に行<sup>い</sup>くという説<sup>い</sup>です。もし死<sup>い</sup>者<sup>い</sup>が天<sup>い</sup>国<sup>い</sup>に<sup>い</sup>い<sup>い</sup>るとするのなら、その<sup>たましい</sup>魂<sup>め</sup>は目<sup>くち</sup>や口<sup>くち</sup>があり、<sup>はな</sup>話<sup>はな</sup>したり、聞<sup>はな</sup>いたりするこ<sup>はな</sup>とができるのでしょ<sup>はな</sup>うか。もしも本<sup>はな</sup>当<sup>はな</sup>に私<sup>はな</sup>が死<sup>はな</sup>んで<sup>はな</sup>霊<sup>はな</sup>の世<sup>はな</sup>界<sup>はな</sup>、天<sup>はな</sup>国<sup>はな</sup>から<sup>はな</sup>魂<sup>はな</sup>の<sup>はな</sup>状<sup>はな</sup>態<sup>はな</sup>で目<sup>はな</sup>と口<sup>はな</sup>、耳<sup>はな</sup>を持<sup>はな</sup>って<sup>はな</sup>おり、見<sup>はな</sup>聞<sup>はな</sup>きで<sup>はな</sup>き<sup>はな</sup>けるなら、<sup>はな</sup>地<sup>はな</sup>上<sup>はな</sup>に残<sup>はな</sup>して<sup>はな</sup>き<sup>はな</sup>た自<sup>はな</sup>分<sup>はな</sup>の<sup>はな</sup>家<sup>はな</sup>族<sup>はな</sup>の<sup>はな</sup>そ<sup>はな</sup>の<sup>はな</sup>後<sup>はな</sup>を<sup>はな</sup>眺<sup>はな</sup>めて<sup>はな</sup>いて<sup>はな</sup>幸<sup>はな</sup>せ<sup>はな</sup>な<sup>はな</sup>の<sup>はな</sup>だ<sup>はな</sup>ら<sup>はな</sup>う<sup>はな</sup>か<sup>はな</sup>と<sup>はな</sup>疑<sup>はな</sup>問<sup>はな</sup>も<sup>はな</sup>お<sup>はな</sup>こ<sup>はな</sup>り<sup>はな</sup>ま<sup>はな</sup>す。こ<sup>はな</sup>の<sup>はな</sup>よ<sup>はな</sup>う<sup>はな</sup>な<sup>はな</sup>考<sup>はな</sup>え<sup>はな</sup>も<sup>はな</sup>起<sup>はな</sup>こ<sup>はな</sup>す、「決<sup>し</sup>して死<sup>し</sup>ぬことはない」と、※

6断<sup>だんげん</sup>言<sup>へび</sup>して蛇<sup>げんざい</sup>はエバから現<sup>ひとびと</sup>在<sup>かみ</sup>ま<sup>はな</sup>での<sup>はな</sup>人<sup>はな</sup>々<sup>はな</sup>を神<sup>はな</sup>から<sup>はな</sup>離<sup>はな</sup>れ<sup>はな</sup>さ<sup>はな</sup>せ<sup>はな</sup>よう<sup>はな</sup>と<sup>はな</sup>し<sup>はな</sup>て<sup>はな</sup>い<sup>はな</sup>る<sup>はな</sup>の<sup>はな</sup>です。

※4 <sup>く</sup>朽<sup>く</sup>ち<sup>つち</sup>る<sup>つち</sup>：腐<sup>く</sup>っ<sup>く</sup>て土<sup>つち</sup>になる

※5 <sup>り だつ</sup>離<sup>はな</sup>脱<sup>はな</sup>して<sup>はな</sup>：離<sup>はな</sup>れて

## 5. 水曜日：罪の結果

「このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。」(ローマ5：12 口語訳)。

アダムとエバが犯した罪(神さまとの約束を破った)の結果、世界に死が入り込みました。それまでは仲良しだった人間と動物、自然との関係が壊れました。ここから 茨 やアザミなど人を傷つける草や、動物たちが食べるためや権力を得るために命を奪うようになったと聖書は教えています。しかし、神は罪の問題に対する解決も用意されます。創世記3：15(口語訳)「わたしは恨みをおく、／おまえと女とのあいだに、／おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、／おまえは彼のかかとを砕くであろう」と。神は正しい方であり、愛のお方です。罪に対して、裁くということと許すということができるお方です。ローマ1：18(口語訳)に「神の怒りは、不義をもって真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示される。」とあります。この神の怒りは、子羊(イエス・キリスト)に降りかかりました。神はご自分が犠牲となって、罪から人類を解放されました。神の子であるイエスは、アダムから再臨までの全人類の犯した罪を肩代わりするために十字架にかかけられました。

## 6. 木曜日：最初の福音の約束

罪(神さまとの約束を破った)の結果、アダムとエバは神様が用意したエデンの園から出ていかなければならなくなりました。このとき、アダムとエバは神から羊の毛皮の服をあたえられます。アダムとエバに毛皮の服を与えるために神は、羊を犠牲になさいました。「もし、ひとりの罪過によって、そのひとりをとおして死が支配するに至ったとすれば、まして、あふれるばかりの恵みと義の賜物とを受けている者たちは、ひとりのイエス・キリストをとおし、いのちにあつて、さらに力強く支配するはずではないか。このようなわけで、ひとりの罪過によってすべての人が罪に定められたように、ひとりの義なる行為によって、いのちを得させる義がすべての人に及ぶのである」(ローマ5：17-18 口語訳)。これは代表選であらわされる救いです。

① 最初の戦いで、「人類の代表者アダム」と「蛇の姿で誘惑してきたサタン」の戦いがあります。

この戦いに人類は※7敗北して罪が入りました。

② 次の戦いは人類の代表として、人となられた神、イエス・キリストとサタンの戦いです。この

戦いでイエスが勝利して、私たち人類は罪からの解放を得ました。キリストの勝利によって、罪からの解放は私たちに与えられました。

※7敗北して：負けて

## 7. 金曜日：さらなる研究

世の中には、一度死んで帰ってきた※8臨死体験をした人々がいるといわれます。2014年9月14日放送のNHK特集で、※8臨死体験が実際にあるのかということが取り上げられていましたが、この結論は、※8臨死体験はない。脳が作り上げた※9架空の情報であるという結論が出されていました。私個人の中学時代の体験ですが、理科の授業で、先生が見せてくれたクロロホルムという、吸うと意識がなくなる薬を、友達が自分の制服の袖に染み込ませて、後ろから私の鼻に押し付けてきました。私は驚いて、息を深く吸ってしまい意識を失ってしまいました。意識がなくなる瞬間、私はツツジの花がいっぱいに咲き誇った山の中を鹿が私に会いに来て、「ここから帰りなさい」と言われて、意識が戻っていきました。この体験から私は、人のイメージする力が強く、まして死んだ状態から回復すれば、それは天の国から帰ってきたように感じるものかもしれないと確信しました。何を信じてよいかわからない時代だからこそ、聖書が言うように神からくるものを信じて歩んでいきましょう。

※8 臨死体験：「死んだ後の世界へ行った」体験

※9 架空：想像

## ディスカッションのためのテーマ

- ・神様に従っていくために様々なことを通してテストされるとあります。どのような体験をしたことがありますか。神様を選ぶ理由がありますか。(日曜日)
- ・神に代わって自分が正しいと第一にしてしまうことが無いように、どのように気を付けることができますか。
- ・サタンに負けないように、気を付けて歩むためにはどのように生きることがよいでしょうか。